

トヨタ財団検証提言助成報告会

「まちづくりトークカフェ」



平成 28 年 3 月 27 日(日) 佐竹台市民ホール

佐竹台スマイルプロジェクト実行委員会

開会のあいさつ

(水木)

みなさんこんにちは。佐竹台スマイルプロジェクト代表の水木です。

今日はこんなにたくさんの方々に集まってくれた、ありがとうございます。二時間しかないので急いで進めさせていただきます。

この行事に先立って、「佐竹台の写真を撮ろう」というイベントを開催しました。ここで優秀な写真を撮ってくれたお子さんを表彰したいと思います。今日、この会場に入ってから展示してある写真をご覧になられたかと思いますが。小学生の皆さんが撮った写真を掲示しています。お帰りの際にでもご覧いただけたらと思います。

この行事を主催して私たちといっしょに活動してくれているメンバーを簡単に紹介させていただきます。青少年対策委員会の青少年指導員のみなさん。立ってくださいーい。お仕事です。(笑)。谷口さん、末広さん、山本さんの三人と浦濱さん。さたけん家のみなさん。新名さん、勝村さん、片山さん。本日、このメンバーで準備等々やっております。よろしくお願いします。では青対委員長から表彰をお願いします。

「佐竹台の写真を撮ろう」の表彰

(浦濱委員長)

青少年対策委員会委員長を務めさせていただいています。みなさんに助けられてばかりでしたことはしていないのですが…

「佐竹台スマイルプロジェクト」はもと子どもたちのつながりで集まった保護者を中心に立ち上げて、その時の連合自治会長だった谷川二さんにご協力いただき、市民のための新しいコミュニティをどうやって作っていくかと活動を始め、『さたけん家』をオープンしました。それから五年経ち、その間の活動を総括してみなさんのご意見をいただくというのが今日の趣旨でございます。今日お越しの先生方にも意見をまとめていただきました。後ほどみなさまにもご意見をいただく予定であります。まちづくりにたいして興味を持っていただけだと思います。

先立って「佐竹台の写真を撮ろう」(昨年十一月に開催)の表彰式を進めさせていただきたいと思います。

ウチの息子も、青少年指導員の谷口さんのお子さんもそうなんですが、主に大学生が中心にやってくれました。あとは頼むぞ！



佐竹台地区青少年対策委員会の
浦濱祐一さん

(浦濱)

僕たちは「ワカモノ会議」というものを使って

います。先ほど父が言っていたように僕たち学生が主体となつて地域のイベントを企画したり参加したりするような存在です。「佐竹台の写真を撮ろう」も僕たちが企画して、小学生たちと一緒に参加した行事です。

(谷口)

昨年の十一月十七日に「佐竹台の写真を撮ろう」と題して佐竹台の風景を写真に収めて佐竹台の魅力を再発見してもらおうと思つて企画しました。イベントは小学生を対象に行いました。特に優秀な写真を撮ってくれた小学生をこの場をお借りして表彰したいと思います。

二人、表彰の予定だったんですが、ひとりが残念ながら欠席になってしまい、今日は中前洋輔君を表彰したいと思います。

(拍手)

(浦濱)

表彰状、中前洋輔君、あなたは「佐竹台の写真を撮ろう」の写真撮影において頭書の通り優秀と認められポストカードとして販売されることになりました。よつてここにこれを表します。二〇一六年三月二十七日 佐竹台スマイルプロジェクト代表 水木千代美

はい、おめでとう。ポストカードも副賞としてお渡しします。

(拍手)

(中前)

あんなに一度に多くの写真を撮るのは初めてだったので楽しかったです。

(浦濱)

これをもちまして表彰式を終わらせていただきます。ありがとうございました。

「まちづくりトークカフェ」はじまり

(柳瀬)

ありがとうございます。

皆さんのお手元に「縁育読本」という素敵な冊子が配られているかと思います。『さたけん家』が今日に至るまでのきっかけから歴史を刻んできたことを検証した内容になっています。検証するにあたってはトヨタ財団さんからご支援をいただきました。『さたけん家』だけで終わらすのではなくてこの取り組みを吹田市などいろんな各所で行っていただきたいというプロジェクトの思いでまとめていただきました。おうちでじっくりお読みいただけたらと思います。この中にもこういう思いが込められているのかを代表の水木さんから紹介していただきたいと思います。

(水木)

この冊子をデザインしてくださったのは中島さん、小崎さんです。中島さんは学生の時から「佐竹台スマイルプロジェクト」を手伝ってくれていて、今も手伝ってくれています。

(中島)

地域の冊子を作ることはすごく難しくて普通の仕事どおりには原稿が届かなかったり大変なこともあったのですが、思いをモノとして形に残すデザインの仕事ができて光栄に思います。

佐竹台スマイルプロジェクトの説明

(水木)

この冊子を作るにあたってたくさんの方に協力いただきました。ご協力いただいた先生方には後ほど登壇していただきます。

「縁育読本」の要約をまとめましたので画面を見ながら説明していきます。

トヨタ財団の検証提言助成に申し込むきっかけからお話していきます。

『さたけん家』は二〇一〇年のトヨタ財団の国内助成を受けたことをきっかけに出来ました。商店街に誰もが立ち寄れるコミュニティカフェを作る「場所」作り、世代間の交流ができる寺子屋を作る「場面」作りのため、誰もが参加できるプロジェクトを行うということで応募させていただきました。今年で丸五年になります。いろいろなコミュニティの芽が出てきていますので、少しは地域に寄与できたかなと思っています。

福祉や教育の活動はお金を生むものではないのですが、やればやるほど小学校にひとつくらいこういった場所があればいいのになと。(さたけん家は)大家さんがプロジェクトメンバーなので、家賃を三万円にしてくれているため成り立っているんですね。大家さんも高齢なので、もしものことがあったらこの取り組みが消えてしまう。仕組みとしてよく出来ているのだからか形に残したいと思って「トヨタ財団」の検証提言助成に応募した次第です。

―『さたけん家』とは―

『さたけん家』は二〇一一年九月にオープンして今年で五年を迎えます。営業時間は十一時から十六時。定休日の水曜日以外は営業しています。座席数は一階に十四席。二階に二十二席。ランチは五百円。ドリンクは二百円。ランチを食べていただいた方は百円。登録スタッフは約四十名。メインで動いていただいているのは二十五名。スタッフの年齢は三十代から六十代の主婦が中心。利用者はだいたい月間約六八〇名前後。年間約八千名。この算出方法はランチもしくはドリンクを注文していただいた数で数えていますので、注文をされていないお子さんなどは入っていません。ここに学習支援等の行事の参加者を含めると年間一万人くらいになるかと思っています。

ここで何をしているかというと、この場所を運営するためにコミュニティカフェをしています。ランチ、デザートの上りの一割を光熱費として入金していただいたものと貸室料で維持しています。子どもを育む活動や写経カフェなどの本来の目的のコミュニティ活動もしています。

本当にお伝えしたいことは「縁育読本」に書いてあるような小さなエピソードの積み重ねなんです。それをお伝えしていると、それだけで時間が埋まってしまいきますので、おうちでじっくり読んでみてください。

『さたけん家』は「すべて、こうであつたらいいのになあ」の思いから始まっていて、予算を立

てて…と行ってきたわけでは無いんです。もつと親子のニーズに合ったものが出来ないかな…で「おひさまクラブ」を作るとか。こういった場所があつたらいいな…で「さたけん家」「マルシェ」「さたけ教室」「大人の寺子屋」「まちライブラリー」と、思いからすべてが始まっています。

『さたけん家』がどういった形で使われているかは、報告書の十四から二十一ページにまとめています。利用されている方は佐竹台の方が四割。吹田市内、市外がそれぞれ三割くらい。アンケートをとる時によく来てくれている高齢者の方は「良く見えへんからそんないいわ」となつてしまつたりで、きつちり取れてないのもあつて、もうちよつと高齢者は多いかなと思います書いている。いただいた方の内訳はこういう数字になっています。男女比は二対八。一人暮らしの高齢者で常連の方もいらつしやいます。当初、予想した通りの使い方をしていただいてると思います。

使われ方は、二階は靴を脱いで上がれる板間と畳のお部屋なので赤ちゃん連れのお母さんによく使っていただいています。一階は高齢の方が使っていたことが多くです。私が子育てをしていた頃から、子ども連れで行ける場所はすごく少ないので、重宝していただいているのかなと思います。写経カフェの先生の教室は、高齢の女性で賑わっています。写経カフェをはじめ、自分の得意を生かした編み物カフェ、はがき絵教室なども開催しています。

―『さたけん家』の運営のしくみ―

『さたけん家』はランチの売り上げ等々の運営の要を一日スタッフが担ってくれて継続できています。よく聞かれる質問で「毎日必要な一日スタッフをどうやって回しているのか？」ですが、メーリングリストで聞いて、埋まらない日は「この日は誰か入れませんか？」とお願いして入っていただいています。

居場所としての課題は、夕方など、商店街でカップラーメンを食べているような子どもが入れる場所にしたいなと思つてはいるんですが、やりたい福祉活動はお金を生まないのです。私がずっと入れるわけでもない。お金持ちの奥様だったらこういうことばかり出来るんですが、私自身パートに行っている。ずっと無給では誰かにお願いもできない。本来やりたいことが全部出来ていない。財源の確保が今の課題です。

今から二つ例を挙げさせていただきます。私は「佐竹台スマイルプロジェクト」の代表ですが「青少年対策委員会」の指導員でもあります。こういう活動は、目的のために誰がどう動くかを考えたほうがスムーズだなと思つていて、先ほど浦濱さんを紹介しましたが子どものことは「青少年対策委員会」と一緒に行っています。大人の寺子屋などは「老人会」の協力をいただくなど、その問題を解決したいなと思う人が集まつて動くような例として説明させていただきたいと思ひます。

―学習支援について―

今、子どものことで取り組んでいるのは「さたけ教室」という学習支援です。これは仕組みを作ろうと行っています。毎週金曜日に、小学生が午後四時から六時、中学生は夜七時から九時、夜六時から七時の間は夕食の時間。大学生は御飯がついていて、中高生は四百円で晩御飯が食べられる。小学生に教えているのは中高生。中高生に教えているのは大学生。それらを支えているのは私たち大人。夕食も『さたけん家』スタッフが作つてくれています。詳しくは「縁育読本」を参照ください。

学習支援の収支は報告書に間に合わなかったのでここでご説明したいと思っています。文字が小さいので口頭で。(別途スライド資料有)もともとこの仕組みは貧困の子供が十六%と言われている時代、各地域でサポートしないと間に合わないだろうと思ひ、なるべく税金をかけずに行うにはどうしたらいいのだろうと思ひから始まっています。小学生の部は今ほボランティアでやっているの年間五〜六万円で行っているんですがこれを仮に「太陽の広場」などと同様に時給八二〇円を払ったとしても地域でやれば年間十萬円の補助で、貸室料が要らなかつたら年間五萬円の補助を入れてもらったら出来るという数字が出ています。中高生の部も同じく大学生に一回二千元を払つて、スタッフに八二〇円の時給を支払ったとしても年間の補助が二十万あれば一ヶ所出来る。中学校区に一つは欲しいと思ひ

ているので、二十ヶ所作つても年間四百万くらいで出来るという計算になる。

こういうのつてやつてみなきゃ分からないので気付いた市民が始めて、吹田市にお伝えと一緒に考えるという形が良いのかなと思っています。国自体がお金が無い時代になってきた。私たち市民も出来ることを考え、陳情ではなくてこういうふうによりませんかという時代になったのかなと。

この学習支援では、今年、中学生が無事に高校に合格しました。その子達がまた手伝いに来ると言ってくれる。その関係が作れたことが一番の収穫です。『さたけん家』の店長、新名さんがお祝いに回転寿司に連れて行ってくれたんですが、はたから見たらおばちゃんについていく中学生つてすごくないですか？一緒にお寿司を食べている光景。そういうのはすごくいいなと思います。

ーおひさまクラブについてー

「おひさまクラブ」は、建て替えの時に佐竹台連合自治会の谷川さん、大津さん達が、子どもが遊べる場所を作ってくれるデベロッパーさんに売って欲しいと依頼したところから始まり、吹田市に寄付された場所で、午前十時から午後二時の間、子育てサークルに貸し出されています。午後は二時以降は地域で使えるようになっていくんですが、もつとお母さんたちの力を発揮できる場所と子育て支援が合致できないかなと思ってます。今回、吹田市の子ども部さんの許可を得

て全七回、地域のお母さんたちを結ぶイベントを開催しました。

カルチャースクールで数千円出して受けるような教室を五百円から千円で参加できるようにしました。思った以上に講師のお母さんたちのスキルの高さに驚き、また参加する人もこれくらいの金額だったら気軽に来られると。このようなマッチングで、おひさまルームがフル活用できて地域の方の活躍の場もできる。今のお母さんたちは高学歴の方が多いので力を持っているんですね。ある方は旦那さんの転勤で来られたピアノの先生なんですけど、そういう方の力を発揮していただける利用の仕方を吹田市さんに提案するので一緒に考えて欲しいなと思います。

お金を取ると公共施設を借りられないことが多いのですが、潤滑油になるお金、継続できるお金をいただくことで両方ともにメリットがあるということを理解してもらえたらなと思います。

「また参加したいですか？」の問いに、「もちろん」が100%。「価格は適当でしたか？」に「もちろん」が100%。「開催時間はいつがいいですか？」には、「午前」が25%。「午後」が33%。「どちらでも」が42%。時間等を検討してプログラムを組めたらと思っています。

ー提言ー

提言としては、「居場所を作る」。地域活動をされている方は場所に苦勞されていると思います。が、縁が育まれる自由に使える空間をまず作る。

「誰もが使える場所にしよう」。青少年会館とか勤労者会館とか年齢や立場で分けた建物がある本にはたくさんありますが、その年齢層しか住んでいないまちつてないじゃないですか。使う時間も違うんだから一箇所をいかに上手に使うかを考えていけばいいんじゃないかと思っています。

「名前を覚えられる範囲にしよう」。小学校の校区とか連合自治会の範囲とか、〇〇さん、と覚えらるくらいがいいのかなと思います。

「継続できる仕組みを作ろう」。特に福祉や支援系は、「明日からは出来ません」は、なるべくやっちゃいけないと思うので。

「モチベーションをつくろう」。お金が儲かればそれはそれでこしたことは無いんですが、それが無いのであれば必要とされることや自分が何かを発表できるなど、そういったモチベーションを作っていく。これから自分たちの地域に居場所を作ろうという方にオススメしたいなと思います。細かくは報告書をご覧ください。

こうした方が良かったよという点では、「知識や元気の応援をもらおう」。私はたまたま校区変更でこの地域の方々にお世話になったんですけど、それからいろんな方々のお付き合いが生まれて、今日もたくさん来ていただいています。地元の人に応援してもらえると、とても良い活動になると思います。

「研究者や学生の力を借りよう」。今日も先生方に来ていただいています。こういう活動をしていると、なかなかあちこちに行くことがで

きないので、そういった情報を教えていただく。学生さんには、おとなも頑張らなきゃと思わせてくれるエネルギーがある。都合の良い人手ではなく、学生さんの勉強にもなるようにと考えているとプロジェクトがスムーズに進みます。

「人と人としてのお付き合いをしよう」。議員さんにも協力やアドバイスをいただくことがあるのですが、私は議員さんをお願いして何かを変えようとしたことは無いと思います。議員さんとして付き合い合っているのではなくて共感してくれる方として付き合い合っている。学生さんでも行政の方でもそう。子どもたちのためにとか高齢者のためにとか。共感してくれる人としてお付き合いしているとお手伝いをしてもらえます。

こちらの冊子には書いていませんが、この中で代表をされている方などに、年下の私が言うのもおこがましいかもしれませんが、正直この五年間、楽しいことばかりではなくてどちらかというと七対三で七がしんどい生活だったと思う。こうだったらいいのになあで始めちゃったんですが、もし五年前の私に戻るんだったら「やめておきなさい」と言ったと思う(笑)。だけど続けてこられたのは「ありがとう」と思えるメンバーがいたことだと思います。代表が一番しんどい思いをしよう、最後の責任は私が取らなきゃという思いがあれば、「ありがとう」と思えるプロジェクトになるのかなと思います。

今回「トヨタ財団」の提言助成は「コミュニティは人、町を変えられるのか？」として応募し、

採択され予算をいただきこの会を開くことができました。結論としては「コミュニティカフェは縁を育む場所」になるんだなというところに落ち着きました。町を変えられるかはわからないですが、縁を育むことでどんな人の輪が広がって：今日もこんなにたくさん来ていただけたと思うなかつた：こうやって支えてくださる方が増えて、縁を育む場所になるんだなと思いました。以上で私の持ち時間がやってきました。今日は本当にありがとうございます。



佐竹台スマイルプロジェクト
水木 千代美 代表

これからのまちづくりに対する思い

(柳瀬)

水木さん、ご報告ありがとうございました。
佐竹台で生活をする当事者ならではの視点で自分たちが住む町を変えていきたいという思いから始まった活動ですね。

楽しいことばかりではなかった。大変な思いもしながらでもやっぱり次の世代の子供たちに何を残すのかということが彼女、彼らの活動の原動

力になっているのではないかと思います。「縁育読本」にご協力してこられた先生方からこれらのまちづくりに関して三名の方に語っていただきたいと思います。

近畿大学の鈴木毅先生。

大阪人間科学大学の石川久仁子先生。

大阪教育大学の新崎国広先生。

おひとり十分の短い時間ですがよろしくお願いします。



吹田市立市民公益活動センター
柳瀬 真佐子さん

先生方のお話

―近畿大学 鈴木毅先生―

二年前に近畿大学の建築学部に移りましたが、一九九七年に大阪大学にきて以来、千里ニュータウンの新千里東町や佐竹台を中心に研究や地域活動をしてきました。というより、むしろ町のあり方について学ばせていただきました。

今日お話ししたいのは「当事者の時代」と「周回遅れの千里ニュータウン」という二つの事です。

まず「当事者の時代」。この数年考えていることなんですが、今、まちづくりは「当事者」がやる時代になりつつあるのではないかと。かつては国など公共と専門家が町を作っていたのが、近年は「当事者」、つまりその事柄・問題・場所についていちばん詳しく、切実に欲しいと思っている人が自分たちでやる時代になったと思うのです。たとえば、これは昨年私が見学した施設の写真です。建築の専門家として全国いろんなところに見学に行くんですが、昔の見学先はだいたい〇〇大学の先生の指導で作りましたとか、国土交通省の制度第一号で作りましたとか、そういうものがほとんどだったのですが最近違います。

石川県の社会福祉法人佛子園が運営している「シェア金沢」とお寺を福祉施設に転用した「西圓寺」「徳島の神山町の一連のプロジェクト」「岩手の紫波町のオガール」、みんな新しい試みの実績で全国的に注目されているところですが、全てその地域の当事者、民間やNPOがやっている。あとで特区になったり補助金がついたりしているところもありますがそれは後追いで、始めたのは町の人たちです。そこが昔と違う。余談ですがこれらの地域のリーダーは風貌が似ている気がします。胸板の厚いたくましい人が多いです。(笑)ここ十年くらい、コミュニティカフェや宅老所など、新しいタイプの地域の場所や施設について研究してきたのですが、これらも「当事者」たちが始めたものばかりです。

千里ニュータウン最初のコミュニティカフェ「ひがしまち街角広場」もきっかけは国の制度ですが、地域の居場所としてのあり方を決め、十五年間運営してきたのはリーダーと住民たちです。民家を利用した宅老所は、病院のような環境の特別養護老人ホームではケアが来れないと考えた人たちが作りました。院内助産所は妊婦さんに十分時間をとって出産まで寄り添いたいという助産師さんたちがつくったものです。病院の中にある産婦人科と選べるようになっていきます。大阪の障害者児童デイ「サンフェイス」の若い理事長は、障害を持つご家族のために始められました。

建築計画の分野では建物を利用者の立場から考えなさいと教えられるのですが、もはや利用者どころではありません。人間は自分たちの活動にふさわしい新しい場所を創り出せるのです。

一つ海外の例をご紹介します。少し前から話題になっている「マギーズ・キャンサー・ケアリングセンター」、通称マギーズ・センターです。これはガン患者が残りの人生を豊かに過ごすための様々なサポートを受けられる場で、最初にスコットランドにできて世界に広まりつつあるのですが、きっかけはマギーという人が乳がんになったことでした。がんになったことはしかたがないが、そのことを受け止めるための場所が病院に無いことに気づいた彼女は、病気を受け入れ、残された人生に立ち向かえる場所が必要だと考えたのです。彼女の旦那さんは有名な建築評論家なので世界的な建築家が建設に協力しています。泣い

たあとに身だしなみを整えられる広いトイレなど様々な工夫があり、元気のである雰囲気のインテリアも特徴です。学校など建築の種別をビルディングタイプといいます。マギーズ・センターは個人名がついたビルディングタイプであり、まさに当事者が創り出した新しい建築といえます。

このような当事者の時代という点からみると、千里ニュータウンは周回遅れになっているのではないかとというのが二つめのお話です。

千里は恵まれたニュータウンです。環境も立地も良く、団地建て替え事業も成り立っています。ただ当事者が何かを始める時代の町としては、むしろ遅れているのではないかと思うのです。慣性の法則というのがありますが、千里ニュータウンを見ると、二十世紀の計画論という慣性が強すぎる町と言いたくなります。もつとわかりやすくいえば、大きな船である千里は時代が変わっても急には曲がれないのです。千里は先進的な考え方できっちり作られています。専門家が計画し、公共が管理・運営する。空間は用途でゾーニングされており新しい用途を入れるににくい。住民は地域外に通勤するサラリーマンが多く、町のことは公共に任せておきたいという意識。こうした状況は、実は当事者が新しいこと始めようとする場合にはむしろ不利に働くのです。

『さたけん家』を始める時、水木さんは千里ニュータウンで出来れば他の町でもできると言っていました。僕は正直『さたけん家』はかなり恵まれているのでそうは言えないと思いました。

佐竹台には連合自治会長の谷川さんがおられてしつかりした自治会がある。行政との関係も悪くない。水木さんはいろんなネットワークを持っている。こういう認識は今も変わりませんが、千里という近代の慣性が強い町で『さたけん家』のような場を始めるのは相当難しいことだったのだと今になって思います。

このように新しい場を作りにくい千里ですが、二十年ほど前からコミュニティカフェなどが出来始めました。今はもうなくなったカフェもある中で、『さたけん家』が今も毎日ランチを出して運営していることは大変なことだと思います。

『さたけん家』の意義は町にこれまでなかった四つの点を造ったことだと考えています。それは、地域の仲間がいつでも集まれる「拠点」、人と人が知り合える「接点」、新しい活動を始められる「起点」、そして生活の区切りとなり、リフレッシュできる「読点」です。最後の「読点」は新名さんが、主婦はいつも自宅にいと煮詰まる、『さたけん家』に行く主人に優しくなれると言われているのを聞いて思いました。

まだ分析途中なのですが『さたけん家』の課題をあげるとすると、まず近隣センターから遠い南千里駅周辺マンションの新住民はじめ、まだ地域全体には認知されていない可能性があります。それから利用者とイベント活動が母と子と高齢者にやや偏っている気がします。もう一つは千里ニュータウンという立地を生かしていないこと。千里は専門家の間では有名で、ここをを目指してく

る研究者・見学者はたくさんいるので、彼らも想定客としてカバーすべきです。あとアカデミー書房という、千里で最初の書店内にあることももつと生かせると思います。最後の二つは、最近我々のグループでお手伝いさせていただき、手応えがありましたので、今後も続けたいと思っています。



近畿大学 鈴木 毅 先生

—大阪人間科学大学 石川久仁子先生—

水木さんと鈴木先生のお話を聞いてほとんど思うことは同じやなど。

私たちは「トヨタ財団」への応募にあたって一年半ほど前から作戦会議を何度も開いて議論してきましたので思うことは同じだなと。繰り返すことになることが多々あると思いますがご勘弁いただけたいと思います。

大阪人間科学大学をご存知でしょうか？薫英学園のほう皆さんピンとくるかもしれませんが。そちらの大学で働いています。

(スライドを見て) 若かりし日の私です。私は万博の年に南千里にあった新千里病院で生まれその近辺で育ちました。この階段の風景、みなさん懐かしくないですか？昔の千里ニュータウンは基本五階建の団地で一階部分はコンクリートの階段が付いていて子供の時によく遊んだなど懐かしい風景です。

社会福祉の地域福祉が専門になります。そのなかで誰もが自分らしく暮らすことの出来るまちづくりをテーマに勉強しています。先ほど鈴木先生がご紹介くださいましたが千里ニュータウンは理想都市として開発された町です。報告書に二ページほど書かせていただいたのですが環境に整った団地と緑のある緑地で育ったなかで、また福祉に関心を持つといろんな側面があることに気づかされました。

町には様々な困難を抱えた方々がいらっしやいます。現在は亥子谷に住んでいます。が大学三年生のときに南千里の保健所の千里支所の精神保健福祉士の補助のアルバイトをしていました。千里ニュータウンエリアで心の病を抱えた人々を専門的に支援する公的機関です。そこに関わっていると今まで福祉の勉強をしていましたが精神障害を持った人は反射的に怖いなと思うところが正直あったんですけれど、このアルバイトをすることで実際にいろんな方々にお会いし、そん

なことはないことに気づきました。また、思っている以上に非常にたくさんいらつしやる。ごくわずかなところにいらつしやるイメージがあったのですが自分の住んでいる町に、隣に、多くの人が暮らしている。ああそうかいそんな悩みを持った方が知らないだけで隣に住んでるんだということに気づかされました。

他の障害を持つ方も住んでおられますし、認知症の方も住んでいます。『さたけん家』に通っている間に夕方、夜遅くまでミーティングしている和外にぼんやりと立っていらつしやる女性がいらつしやる場合があります。おそらく認知症だと思われます。「今日はどここの店は開いてないんですか?」「いや今日は開いてないですよ」とお話をして納得して帰っていかれました。

大学で学生を教えるなかで学んでいるのが家庭内暴力、虐待を経験している学生が多い。福祉が領域ということもあるのですが知らないだけでこれもまた家庭の中でいろんな問題、暴力を受けている人たちがいる。

そして建て替え、立ち退きによって他の地域に転出していかれる方もいらつしやいます。これは千里ニュータウンだけではない。高齢者の問題を調べると立ち退き問題で住む場所を失った人がけっこうたくさんいらつしやると分かっています。そうしたいろんな困難があります。

千里ニュータウンは転勤族の町でもある。私も父親が転勤族で自宅に住んでいました。それもひとつのパターン。でも転勤って大変なんです。そ

こであらためて自分の生活基盤、子供たちの基盤を作っていくのはとても厳しいこと。

転勤族で引越してきたけど誰とも話すことが出来ないという悩みを抱えている人もいます。数ヶ月悩んでようやく『さたけん家』に来て店長と話して心のわだかまりを出すことができたという話も聞いています。そうしたいろんな思いであつたり、生活するのに難しさを持った方々がいる。

そういう人たちがそれなりに暮らしていくためには町にはいろんな場所が必要。まず「住まい」が決定的に必要なんですがそれだけではなく「気軽に相談する場所」「ケア拠点(デイサービス・クリニックなど)」「活動拠点(動的な居場所)」「交流拠点(静的な居場所)」が必要です。『さたけん家』は「活動拠点」と「交流拠点」にあたると思います。大きく言えば町のなかには「居場所」というものが必要です。活動的に活発にするための動的な場所も必要だし、でもそういった場所は避けたいという人もいます。ただ静かにそこにいる。それだけでもすごく意味がある。鈴木先生のお話でいうと「読点」のところでしょうか。そういう場所、人生の生活の日々のなかで静的な居場所も必要になってくる。動的な居場所と静的な居場所を『さたけん家』は提供しているのじゃないかと思えます。

今回の「トヨタ財団」の応募テーマが「コミュニティカフェは人や町を変えられるか」という大きなもの。実は私も提案した人間でもあるのです

が検証作業を進めていくと、あ、違うんじゃないかと。コミュニティカフェが町を変えるんじゃないかと変わってしまうのは町の方だろうと。大きな時代によって町は変わる。千里ニュータウンは建て替えの大きな波もある。南千里の駅前はまだにも変わりすぎて子供時代の思い出ある町が変わってしまったことは非常に胸が痛む。町って継続性というか、記憶が大切だと思うんですが…。そのようにいろんな事情で否応なく変わっていく。でも人間にはいろんな世代の人と人との心が重なり合う場所が必要です。どんなに時代が変わっても町が変わっても必要な場所がある。そういった人間にとって大切な場所を守っているというのが『さたけん家』なんじゃないかと思っています。

ですのでコミュニティカフェの部分だけ考えるのではなくて千里ニュータウンであつたり佐竹台とセットだと思ふんです。佐竹台に起こった建て替えだったり人と建物の高齢化をどう解決しようかという流れのなかで近隣センターのアカデミー書房という建物の歴史と千里ニュータウン五十年の歴史というものが『さたけん家』を生み出したのではないかと。

しかし、単に人と町と建物の記憶だけでコミュニティカフェという場所が生まれるのではなく人の要素、キーパーソンの要素も必要です。まず、四十代の水木さんと八十代の大家さんの坂本さん、五十代の新名さんがキーパーソンとなり、四十代を基軸に子どもであつたり大学生であつた

り六十代、七十代、また三十代であったりというようにいろんな世代の人たちを巻き込んでいたことが『さたけん家』の成功の秘訣ではないかと思います。



大阪人間科学大学
石川 久仁子 先生

最初は資料に「佐竹台に生まれた」と書いていましたがやっぱり「佐竹台が生み出したんだ」と思っています。この町が『さたけん家』を生んだと。私は亥子谷に住んでいます但自分の町にも『さたけん家』のような場所が欲しいなと思います。どこにでも作ればいいのではなくて西山田には西山田の、五月が丘には五月が丘のそれぞれの町の建物の記憶を持った場所にその人たちが働きかけてつくることが求められていると思います。千里ニュータウンもそうですし西山田も大阪府によって開発された町です。与えられた町なんです。でも、与えられた町のままでではなくてそこに暮らす人々が町の主役になることがとても大切なかなと思います。

居場所づくりのネックは大家・オーナーですよね。その場所を提供していただける方。そこを継続させていくため違う意味のオーナーも必要。個

人はもちろん、公的な関わりも必要。そこをどのように今後、考えていけるかが課題だと思います。

―大阪教育大学 新崎国広先生―

大阪教育大学の新崎と申します。

「縁育読本」の四十六ページを開いてみてください。今日はなんにも資料を用意していなかったものでこちらを見ながらお話をさせていただきます。

鈴木先生や石川先生のようにこのプロジェクトに最初から参加したのではなくて僕が水木さんと出会ったのはちょうど三年前。箕面にある「暮らしづくりネットワーク北芝」の子供の貧困をテーマにした講演会で一参加者として教え子の実践を聞いていました。そのとき偶然にも隣に座られたのが水木さん。水木さんが司会者の方にあてられて『さたけん家』の発表を聞かせていただいてこれはぜったい僕も仲間になりたい。教えてほしいと思ってナンパじゃなくて声をかけたんです。やましい思いはありませんでした(笑)。

ちよつとだけ自己紹介をさせていただきます。今は大阪教育大学で地域福祉や福祉教育、ボランティア学習をテーマにしています。もともとは十八年前から二十一年間、肢体不自由児施設、障害がある子供たちの施設で個別支援の介護や相談、ボランティアのコーディネーターの仕事をしていました。障害がある子供たちが地域から排除されたり仲間はずれにされる町をどうしたら無くしていけるかということから地域を学んだりボランティアのことの勉強をはじめました。

現場にいたときに障害のある子供たちのリハビリや介護、それから応援をした子供たちと保護者の方が地域に帰っていった時に二通りの生き方がありました。ひとつは今日お集まりの皆さんのようにいっしょに考えていこうというあったかい地域に退所していった子供たちや保護者の方は本当に元気になって、障害者自立生活センターのセンター長になってがんばっている仲間もいます。でも一方では障害者の人を仲間はずれにされる地域に退所していった子供たちはせっかく元気になったのに施設に戻ってきて保護者の方が心を病んでしまう。そんな現場を見たとき目の前の子供たちや保護者の方の応援も大事やけど地域の中での仲間づくりや応援団を作るってすごく大事やなと思って勉強は嫌いやったんですが今は研究とか教育という分野に入ってきました。

なにが惹きつけられたかというと、「縁育読本」に書いてあるように三つの視点からお話させていただきます。

まず、初めて出会った鈴木先生と共通点があるなあと。当事者の時代。じつは福祉もそうなんです。今、福祉は行政がやるもの、専門職がやるものという意識があるんやけど実は当事者の人たちがノーマライゼーションという言葉、知的障害の人たちが地域の中で生きていきたいという家族会の運動からスタートしたんです。まさに当事者。グループホームが出来たりするのも行政などがやってあげようではなくて自分たちの活

動として取り組んできたということが共通点や
なと思いました。

僕がボランティアの方にいつもお願いしているのは、これからのボランティア、住民の方々は汗もかくけど口も出してくださいと。ソーシャルアクション。いわゆる行政の方に文句ばかり言うのではなくて、こんな素敵な実践をやってるねん、これをやったらもつと地域が良くなるよって。水木さんがスゴイと思うのはお金をかけんとやれる方法を考えてはること。これってウインウインの関係。つまり自分たちの地域を良くしていかうと。同時にそれをやることをやりやすいように提案してはる。これだけのお金が無かったら出来へん。これだけの施設が無かったら出来へんじゃなくて自分たちがこれだけ汗をかく。七割しんどい思いしたと言うてはるけどその中で相手のことを考えて行動されたということがこういった実践につながってくるのかなと思います。

今、貧困は二つの貧困が言われています。ひとつはお金が無いこと。もうひとつは希望が無いこと。社会とつながりが無いことと言われています。社会的困窮。水木さんの学習支援、学びの場づくりにすごく共感しました。それも講師の偉い先生を引っ張ってくるのではなくて小学生を中学生が、中学生を高校生が、高校生を大学生が、というようにお互いが学びあったり教えあったりする関係づくりをされているところがすごく強いなと思いました。

お母さんが自分の子どもやったらイライラするけど他人の子どもだと教えやすいという話がありました。お母さんたちが自分の子どもだけでなくて周りの人を教えることによってお互いに学び合っていくシステムづくり。つまり『さたけん家』での二つのスゴイところは何かというところというアイデアとか工夫。凄く大事やなと思います。

「支援型福祉活動」と「地縁型福祉活動」
難しい言い方なんですが縁とすること。

今日、お集まりの皆さんはNPOとか何かをやつてあげたい、学習支援をしたいとか、こういう取り組みをしたいという思いで集まっておられる。これスゴイ貴重です。

僕は二十三年前、阪神淡路大震災の二年前から吹田の社会福祉協議会でボランティア養成講座の講師をさせていただきました。その時、今日のカフェをやっておられる「ブルーリボン」とか「アムール」とか精神障害の方々の支援と出会いました。僕はどちらかというと「地縁型」。吹田の素晴らしいのは社協は校区福祉員さんの組織が非常に充実していて、地域福祉の観点から各福祉委員会や地域福祉活動を、その地域の福祉活動を全部持っておられて年一回の総会や懇談会でやっておられる。これは凄く良いことやなと思います。ただし、残念やったのはNPOとか市民活動と地縁型の福祉員さんの関係があんまり見えてこなかった。もったいないなあと思いました。同じ地域の中で思いを持った方々が手をつなぐことつ

てスゴイ大事やと思つていたからです。もしかしたら僕が外部から来ているからかもしれません。地域やったらもつと地縁の関係性が濃くてなかなかうまくいかないこともあるかもしれへんけど。そこはちよつと一歩お互いに譲り合いながら地縁型で出来る事と志を同じくするテーマ型、アシエーション型で出来る事が手を組んだらもつともつと素敵なんじゃないかなあと。

吹田市社協で地域福祉活動計画の策定委員長をさせていただいた時に提案して「吹田のこれらを考えるカフェ」のようなことを一緒にやって地縁型の方とボランティアの方やNPOの方と一緒に話し合うという場を提供しました。

僕の大好きな言葉に「教育とは共に希望を語ること。学ぶとは心に誠実を刻むこと」アルゴンという人の詩なんです。夢をやっぱり語らなあかんと思います。

『さたけん家』のスゴイところはみんなで考えてゆく。手話で「覚える」はこう表します（指先を開いた右手を上から頭につけて握る）。「記憶」という手話も同じ。物事を頭に入れる様子を表す。今、子どもの学習支援をするという取り組みがある。一方で子ども食堂。『さたけん家』は両方してはる。これどっちも大事なんですよ。大事なやけど心配なのは学習支援をする事が目的になったり、子ども食堂で食事を提供する事が目的になったりしてしまうこと。本当は子どもたちが僕らのことを心配してくれるおじちゃん、おばちゃん、お兄ちゃんお姉ちゃんがおるんやという事

を学ぶことが凄く重要やと思うんですね。そこをうまく協働させている点が『さたけん家』が素敵やなと思うところなんです。

学習支援も食事サービスも手段です。その目的は何かというと子どもたちが自分のことを大切にされたと思えること。今日の写真の表彰、あの子すっごい嬉しそうでした。きつと一生忘れへんと思う。大人に拍手してもらう中で自分が褒められた。頑張ったら努力したら出来るんだということとを彼らは学んでいくんやと思う。百ほど言っても分からない事を実際に一緒に学んだりする関係づくりがとても素敵やな思っています。

「自尊心」これからの教育や福祉はひとりひとりが自分はおこにあってええんや。この場にあるという事を誰かに大切にされてるんやと思えることが凄く大事やと思っています。

僕が大切にしてる言葉のひとつに「人は必要とされる事を必要とする」という言葉があります。年を取っても障害があっても子供たちでも誰かに必要やでと言われ続ける時に頑張ってみようかなと第一歩が踏み込めるんやないかな。年を取ったから認知症やから障害があるからって排除するんやなくてひとりひとりの可能性をどれだけ伸ばされるか。

今日はお話されませんでした。が、僕の好きな取り組みに「ゆめのみプロジェクト」や「ジョブカフェ」があつて、子どもたちに、なりたいたいおとなになろうと、新聞記者さんやデザイナーの方がお話をしたりする取り組みで、子どもたちは自分が

こんな大人になりたいと思う。学生が子どもたちに勉強を教えることも勉強を教えるだけじゃないんです。ロールモデル。つまり僕もあんなお兄ちゃんになつて今度は勉強を教える立場になりたいという具体的なロールモデルを作つてあげることが我々が引つ張つたり叩いたり支えたりするよりもっともつと自発的に彼らが学んだり地域のことを愛してくれるようになるんやないかなあと。

そういう活動が『さたけん家』かなと思つて今日は聞かせていただきました。
ありがとうございます。



大阪教育大学
新崎 国広 先生

(柳瀬さん)

三人の先生ありがとうございました。
とっても大切なことをそれぞれ10分ですうところにもそもそ無理があつたかもしれませんが、今のお話を受けてこれから後半になります。今日はまちづくり講演会ではなくてトークカフェというかたちで開催しております。

それぞれのグループごとに「ブルーリボン」さんがお茶を用意していただいています。それを飲みながら今から10分間、休憩と言いつつも今のお話を聞いて各グループで三つの質問にまとめていただきたいんです。だいたい一グループ六人くらいしゃいますので、本当は十八個くらいになつてしましますがそれをグループで話し合つて三つにまとめていただくことになります。それらを時間の関係上こちらで整理して皆さんにお返しをするということになります。

では、「ブルーリボン」の皆さんよろしくお願ひします。

(休憩とドリンクとクッキーの配膳)



テーブルごとに、自己紹介をしていただき、質問や感想をまとめてもらいました。



「出前カフェ」を出してくださった、ブルーリボンの皆さま。珈琲とクッキーが好評でした！



後藤市長、トヨタ財団の喜田さんのテーブルも、楽しそうに考えてくださいました。



先生方のテーブルもお茶を飲みながら交流タイム。

質疑応答・意見交換の時間

(柳瀬)

短い時間のなかで皆さん沢山のご質問を出してくださいました。それだけ『さたけん家』の取り組みが皆さんにいろんな形で勇気を与えているのではないかなと思います。すべてのご質問を受けることは時間的に無理なので、個々のご質問については後日あらためてお答えする予定です。

では、代表してこちらを。

『さたけん家』には沢山の方が関わっておられるという事ですが、いろんな人と関わる事はいろんな可能性を引き出しているのではないかなと思う。その可能性を引き出す方法はどのようなものがありますか？

主に『さたけん家』の活動についてのご質問が多かったように思います。このあたりいかがでしょうか？

(水木)

その方のやりたい事に背中を押してあげていただくだと思います。さっき表彰されていた子どものお母さんはベビーマッサージを勉強されたんですね。『さたけん家』で教室を開いてみてはどうですか？と。今は先生になられています。ちよっと背中を押してあげる事かなと思います。

(柳瀬)

ありがとうございます。

『さたけん家』はとてもよく出来た仕組みだと思いますが、これは特異事例なのでしょうか？一

般化できますか？」

今回の「トヨタ財団」の助成もそこが大きなポイントかなと思うのですがこのあたりいかがですか？



数多くの質問を短時間にまとめて進行される
柳瀬さんのおかげでスムーズに進行できました

(水木)

今いらっしゃる方は休日にここに来ているだけで普通の人がじゃないはず。(笑)ここにいらっしゃる方だったら出来ると思いますが、私がラッキーだったのはやっぱり大家さんですね。共感してくれて三万円でもいいよと言ってくれたので出来たところとは特異かもしれません。私たちは、例えば空いている商店街や教室を使っているんですよ、家賃だけ出しますよ、などの手助けがあったら誰でも出来る仕組みを目指してやっていますので出来ると思います。

(鈴木先生)

研究の世界では『さたけん家』のような試みは一般化が出来るのかと必ず聞かれます。キーパーソンに多くを頼る活動は計画論としてどうなんだと自分でも悩んでいましたが、最近では、国や公共がモデルを示して普及させる時代ではないので、一般化せずに当事者同士がお互いに学び合えばいいのではないかと開き直っています。



鈴木先生の本を読んで、話が聞きたくて来られたという参加者もいらっしゃいました。

(柳瀬)

このご質問の一般化というのは同じものを各地で展開するということよりも鈴木先生がおっしゃったようにそれぞれの地域に応じた形でのような展開が出来るのかということだと思います。

(鈴木先生)

いちばん大事なことを言い忘れていました。千里ニュータウンには当事者が何かやろうと思ってもスペースがありません。最近のリノベーションがブームで普通の町なら、若者が空き家の大家さんを説得して店を始めるのが普通です。たまたま『さたけん家』は大家さんが貸してくださっていますが、千里ではこうした事例は稀です。何かを始められる場所が無いことは致命的です。

(柳瀬)

「いろんな地域の課題解決ということで『さたけん家』は取り組んでいるんですがその地域のニーズをどうやって吸い上げて、どうプロジェクト化しているのか？」

というご質問がありますがいかがでしょうか？

(水木)

たぶんそれは女性の方が得意なのかなと思うのですが、暮らしていて、「こうだったらいいのにな」ということを形にしようとしているだけです。それだけだと思う。専業主夫の方も生活をしていたら気付くと思います。

(石川先生)

「縁育読本」に書いたのですが水木さんはけっこう飄々とおっしゃられるんですが、たしかに地域のニーズをどうやって吸い上げるかは福祉でも大切な事項です。普通は地域を調査してアプローチをするんだと教えますが、『さたけん家』はリサーチ云々ではなく、気付いて思いついたらとにかくやってみる。『さたけん家』という舞台が

あつて小さなプロジェクトを怯まずにいっぱい実行する。小さなものでも実行してみてもそこでニーズがあればどんどんそれが広がってくるし共感も広がるし持続していくでしょう。今までいっぱい開いた中で続かなかつたものもあると思うんですね。とにかく実行してやってみること。そして、その時にやろうとする人の背中を押す。多少、強引なこともあるかもしれませんがやってみると思つた以上に活路が広がってくる。なかでも出来るだけ若い方の背中を押すといろんな可能性が広がるかなと横から見ていて思います。



さたけん家が立ち上がった頃からお世話になっている石川先生も「水木被害者の会」会員です(笑)

(水木)
たしかに被害者の会もいっぱい。(笑)

(柳瀬)

『さたけん家』の仕組みとか、皆さんとの関わり方をどうしたらいいかというご質問が多いです。その答えは「縁育読本」に書かれている部分もあるかと思っています。

少し角度を変えたご質問を。

「当事者の課題解決は行政の支援のあり方を変えないと現状ではフィットしないんじゃないですか？」

ということでは行政のトップである後藤吹田市長がいらっしゃっていますので、よろしく願います。

(後藤吹田市長)

これは古くて新しい問題です。

行政というのは公平性が求められます。皆さんも求めているはずですよ。あそこあしているのにウチこれしてくれへん。北はいいけど南はどうよ。緑は多いけど交通問題がある。公平性ですよ。皆さん納税者ですよ。そのなかでこのような特異的な事例を行政が補助するというのは非常に臆病になります。そのときに行政がちゃんとロジックを持たないと何でここに補助をするんやと。先ほどロールモデルの話がありましたけれどもこの取り組みが市内全域に広がっていくと幸せな社会になりますよね、というように議会を説得せなあきません。具体的には後から申し上げましょうか。新たな予算を作りましたので後でご報告いたします。



会場の質問に真摯に答える後藤市長。地域活動の問題点を理解していただいている回答でした。

(新崎先生)

先ほどの鈴木先生のお話を少し発想を変えて、僕の研究テーマが「なぎさの福祉コミュニティ」。今までの福祉施設は、施設の利用者のケアや支援を中心に行ってきました。このため施設と地域との関わりがほとんどなかった。しかし、実は施設と地域がつながって行くことが施設の利用者にとっても地域にとってもだいじなんちゃうか？そういう発想で攻めていかれると結構施設はそれぞれ皆さんに協力してくれるんやないかなと思います。

もうひとつ、後藤市長さんがお話されていたこととで言うと、今までの福祉って黒子で自分たちのやった事をあまりオープンに出さずにやってき

た。これからはやった事はこうやでと。『さたけん家』のスゴイのはプレゼンテーションが上手。あまり興味無い人もイラストから入っていくと面白そうと関心を持つてもらったりする。行政の方にも地域のニーズを知ってもらわなアカン。努力をせなアカン。もうひとつは行政の方をその気にさせるような面白いプログラムを提案していくことも大事。それをやっている取り組みが『さたけん家』やないかなと思いました。



新崎先生のお話は、感情で理解でき、会場の皆さんの共感を集めました。

(柳瀬)

ありがとうございます。

ご質問はまだまだあるんですが、市長は十六時までということですので市長から皆さんにお伝えしたいことがあるようなのでよろしくお願

ます。

(後藤吹田市長)

少しお時間をいただきます。市長の後藤でございます。

先ほどの特異事例かどうかというご質問はこのテーブルから出たんですが私も特異事例で良いと思っています。だって水木さんはひとりしかいてませんので。このテーブルで水木二号をどうやって作ろうかと話をしておったんですがそれは無理なんです。二号を作ったところで地域も環境も違うので同じことは出来ません。ただ、先ほど言い尽くせませんでした。今日は五十川議員もいらつしやいます。簡単に言うとな「トツプランナー補助金」です。行政の公平性を突破するにはトツプランナーを助成する。そのトツプランナーがトツプランナーであることを証明せなアカン。そこで僅かですが予算を立てさせていただきます。以前から水木さんにレクチャーを受けていてあと少しお金があれば。家賃ですね。三万円やから出来る。十万円やたら出来ない。そこをお支えすることの重要性を考えて、支える人をお支えするというキーワードを出させていただきました。これまでの行政は直でいってました。建物を建てて職員を雇ってそこで事業をしてという何とかセンターを作りました。その中に市民のボランティアが入ってもらってというのが従来の行政のやり方。尾浦さんもいらつしやいます。西山田のあっちこっちで旧市内もあります。いろん

な取り組みが始まっています。これは行政と関係なしにやっています。そこで僅かな補助金があるってありがとうございますという形なんです。が、やっぱり皆さん苦しい。じゃあそこに一千万、五千万、一億円かかるかというやない。逆に行政が一億円かけたって出来ないことを皆さんされてます。そこで「トツプランナー補助金」を作りまして今後の課題は是非また教えていただきたい。その審査ですね。今後、本格予算にしていく際にどう誰が評価し、どこを選び、どこを選ばないか。それが課題になると思うんですけども、まずはそのチャレンジをやりたいと思って来年度からスタートします。



後藤吹田市長

それから千里ニュータウンに余裕地が無いというのは鈴木先生がおっしゃる通りです。西山田は典型ですよ。全部設計されてる。小学生が定規で作ったような町。いわゆるコモンズが無いんですよ。誰の土地か知らんけどとりあえずテント立ててなんかやろか。一切ないです。そうなつて

くると公共施設を自由に使える制度。とくに学校ですね。学校くらいしか無いんですよ。公園は都市公園法というややこしいものがあって、学校は学校で厳しいんですが。いかに公共施設を柔軟に使っていくか。それは行政は事故が起こるのイヤ。責任を誰が取るの？結局、市民力です。一回トップランナーでやってみてうまくいけばどんな広がっていきます。学校の備品を盗まれたとかガラス割られたとかなると一気にアウトになります。これも市民力やと思ってます。

支える人をお支えするという事ともうひとつ最近感じている。それは皆さんに共通するのは「ほっておかれへん」気持ちやと思う。これは福祉から教育すべて隣の人が困っているのをほっとくかほっておけへんかです。東京は、ほっときますからね。(笑)道に迷っていても教えてくれない。また聞きません。どうせ教えてくれへんから。大阪はおばちゃんがぜったい教えてくれますよね。これは百年経っても東京が大阪に追いつけない強みやと思ってます。お節介なんです。水木さんも相当お節介やと思いますよ。自分の生活もあるのに。このお節介心。それから大阪弁を喋りはりますよね。これが大きいんですよ。隠しても大阪弁でしたよ。

(水木)

私、九州の人なんやけど。(笑)

(後藤吹田市長)

(笑)イントネーションがね大阪なんです。NPOに多いのは標準語を喋りはるんですよ。それで

地域の団体とNPOが融合しない。融合している例はNPOの方が大阪弁を喋らはる。ベタベタやなくてもいいんです。このあたりにポイントがあるなど私ずつと環境コミュニケーションに関わってきたんですが、どうしても融合しないところはそれがあるなという気がしています。

「縁」と育てる「育」ともうひとつは継続の「継」やと思う。それは行政の責任も大きいと思っと思います。出来ることは下手に口を出さんと小さなお金でええから出しとけと。水木さんの要求型ではない提言型で進めておられるところが行政を動かします。ここで熱く語られて、社会はかくあるべき。私はこんなことをしている。お金が無いから行政がと言うたらたぶんいつせいに行政は引きます。せやけどこうしてさらっと提案されるところに水木一号のスペシヤルなところがあるんやなど。二号は無理やなどこのテーブルで言うてました。(笑)引き続き見守っていききたいと思っますので良い取り組みのヒントを与えてください。お邪魔しました。ありがとうございます。

(柳瀬)

ありがとうございます。ここで市長は退席されます。

(水木)

皆さん、せっかくなので記念写真を撮りましょう！あそこから全体を撮りますので皆さんあちらを向いてください。



参加者全員で記念撮影をしました。みなさんに参加していただいた、ほっこりしたトークカフェでした。

(柳瀬)

ありがとうございます。

今回の「さたけん家」のプロジェクトの取り組みについて検証事業を支援していただいた「トヨタ財団」の方がお越しいただいています。

(喜田)

初めまして「トヨタ財団」の喜田と申します。「トヨタ財団」では地域を対象とした助成を二〇〇四年から始めて十年になり、これまで助成させていただいたところがどのような成果を出しているかをまとめるようなご応募していただき助成をさせていただきました。

狙いとしては各地で成果を出したり、出しつつあるプロジェクトをとりまとめることで横の展開

というか他の地域にも同じような取り組みが、地域の個性はあると思いますが取り組みが広がればいいなと思うことがひとつ。

あとは活動していると目の前のことで一生懸命になると思いますが、一度立ち止まって次にどんな活動をしようと振り返りの機会を持っていたきたいということがひとつ。

今回の成果は他の地域の方にも受け取って広めていただきたい。今日はそういった方も来ていただいていると思うので次のチャレンジをそれぞれの地域でしていただければ助成させていたたく立場としてもたいへん嬉しいです。

『さたけん家』については、五年間を振り返って次の一步として何をやるうかなと考えていただく一年になっていればいいなと思うのでさらなる展開を期待しています。今日のことがスタートという感じで次にどんな展開が生まれるか助成の立場からまた引き続き拝見していければと思っています。ありがとうございます。



公益財団法人トヨタ財団
喜田 亮子さん

（柳瀬）

はい。ここで予定の時間になりました。

先生方には早口で喋っていただいて大変申し訳なく思っております。今日の締めくくりとして代表の水木さんから皆様に一言ご挨拶をよろしく願います。

（水木）

皆さん今日は本当にありがとうございました。私より先生方のお話が面白かったので、もっと聞いてほしかったなと思うのですが皆さんいかがでしたでしょうか？楽しかったですよね？（笑）

（拍手）

目標を持ってやってきたわけじゃないのですが走っているうちにいろんな方にお手伝いいただいて五年を迎えることができたことに本当に感謝しております。先ほどお渡したアンケートに感想を書いていただけると嬉しいです。すべての質問に答えきれいなかったので後日できるかぎりお返事しますのでよろしくお願いいたします。

今日は「ブルーリボン」さんお休みのところありがとうございます。

（拍手）

先生方、『さたけん家』のスタッフ、青少年対策委員会の皆さん、ROCAさん、学生さん、本当に感謝しております。ありがとうございます。また皆さん『さたけん家』で会えることを楽しみにしております。ありがとうございます。

（柳瀬）

これをもちまして「まちづくりトークカフェ」を終了させていただきます。

こちらで出会った御縁を大切にしながら皆さんの生活の中で今日の話を生かしていただくとができれば素晴らしいなと思っています。ありがとうございます。

参加者の声

【感想】

- ・さたけん家が五年間継続されたこと、嬉しく思います。水木さんのエネルギーに感動します。
- ・素晴らしい活動だと感じ入りました。
- ・多数の関係諸団体の方々が『さたけん家』の活動に注目され、一同に会する素晴らしいトークイベントだったと思います。
- ・あつと言う間の二時間でした。ありがとうございました。貴重な学びの場を提供してくださったことに感謝します。困難なことも多いと思いますが、道は開けると信じています。
- ・水木さんの巻き込み力に注目していたのですが、今日伺って、水木さんのまわりにおられる人たちの想いや力を感じました。地域の可能性を改めて感じ、私自身も力を頂きました。
- ・短い時間でしたが、充実した報告を聞かせていただきありがとうございます。同じ取り組みを他所で実行し、成功させるのは難しくても、ヒントになる点がたくさん詰まった報告をまとめていただいたと思います。
- ・興味深かっただけに時間が少し足りなかったかなという感じがする。
- ・地域の方と交流できたことも良かったと思っています。もちろんとても勉強になりました。今後ともよろしく願っています。
- ・大盛会でびっくりしました。関心をお持ちの方が大勢、しかも熱心と感じました。学ぶところ多かったです。

- ・さたけん家をPRするためにもっと人の力(口コミ)を使えばどうか。(例えば新規客紹介キャンペーン等)
- ・すばらしいプロジェクトで書く先生のお話は良かったが、新崎先生のお話が一番心を打ちました。水木さんが言われた、トップでまとめていく苦労が大変であることは本当によくわかりましたし、なしとげて行きたいと思いました。水木さんご苦勞様でした。コーヒー大変美味しかったです。
- ・本日は楽しい時間を持たせていただきました！水木さんのお人柄がたくさんの方々の支援につながっていると思います。
- ・本当に地域で暮らしている方々が(専門家や活動をしている人たちばかりでなく)集まっているところが何よりの成果だと感じました。
- ・さたけん家のこと、あまりしりませんでした。いろいろな素晴らしいことをされているので感動しました。
- ・水木さんをはじめ、登壇された先生方のお考えと共感出来るところが多々あり、とても刺激的な時間でした。当事者が動くこと、まち全体でつなげることの大切さを改めて実感しました。
- ・さたけん家の活動、大変楽しく聞かせていただきました。あまり気負いなく(?)新たな活動や出会の場を作りだしておられる日常の風景を垣間見ることができました。
- ・水木さんのはじめの挨拶の中の、“人と人としてのおつきあい”とても共感しました。又、計画があり進められてきたのではなく、“思い”の中で

進んで来られた点、尊敬します。

- ・町の中に、人との接点があり、気持ちが集まり、渦をおこしている様子にとっても興味があります。キーパーソンである水木さんとお会いできることも楽しみにしていました。学生の時に興味があった、鈴木先生のお話が聞けたことも嬉しかったです。

- ・ブルーリボンさんの歴史があることを知り感心しました。水木さんの視野の広さに今日も驚かされました。さたけん家の注目度にも驚き、佐竹台の誇りだと感じました。不可能を可能にしていける感じがします。すごい力です。おもしろいトークカフェでした。人は必要とされることを必要とするという言葉が心に残りました。

- ・地域やその地域の歴史から生まれた「さたけん家」各先生の話や水木さんの話はつまかさねてきた“生”の体験の言葉で勉強になりました(面白い)。いつかこういう地域の活動をやりたい！

【アンケートからの質問】

Q 鈴木先生へ

これからのさたけん家の課題・これからへの具体的な方策は？

A 鈴木先生

・千里ニュータウンを生かしていない

ご存知のとおり千里ニュータウンは日本全国からの見学が多い町です。さたけん家はこうした見学者に対する受け入れ窓口になれる可能性があります。先日、私の所属するディスカバー千里(千里ニュータウン研究・情報センター)の太田博一さんが佐竹台のまち歩きを実施したところ、太田さんの知識に加えて、様々な世代の住民とそれぞれの思い出が飛び交い、通常のまち歩きよりずっと面白かったです。彼らのような住民が自分の町である千里について見学者を案内できるようになればよいと考えています。

・書店の中にあることを生かしていない

まちライブラリーを開設し実験的に読書会を二回開催したところ、本を話題にすることで初めての人とも深く話せることがわかりました。本やテーマの設定を工夫することで、これまであまり来ていない世代や属性の人が来るきっかけをつくれると考えています。

Q さたけん家へ

これからの課題は？

A 市民レベルの問題は市民で解決できる居場所にすることです。

Q さたけん家へ

スタッフをどのように集められましたか？

A 中心となっているメンバーは、PTAや自治会つながりです。そこからその知人へという感じです。

Q 水木さんへ

「世界の平和は家庭の不和」という格言があります。水木さまのご家庭は平和なご家庭だと思いますが、その秘訣をお教えてください。

A 平和な家庭ではないので…ただ個人を尊重することでしょうか…子どもも含めて

Q 浦濱さんへ

青少年対策委員会のお仕事について教えてください。ひきこもり(生きづらい)↓就労支援に関わっています。

A 青対として直接出来る事はないのが現状です。

・吹田市の関係機関の紹介は可能ですが、もう既に相談に行かれていると思うし…

・青対のスタッフとして活動して頂く事は可能ですが、無理やり引きずり出す事も出来ないし…就労支援…もう大人ですね。結局本人が何をしたいか解らないと青対としてどう

支援していけるか答えようがないところですよ。また、地区ごとに活動内容も違うので…多くの地域ではイベントを中心に行っていると思います。

Q 水木さんへ

活動を継続していくと、利用者に占める常連さんの比率が高くなってくる傾向はないのでしょうか？居住者が転出入で流動する中で新たな住民の方にも利用を広げていくための情報発信(広報)で特に工夫をされていることがあれば教えていただきたいです。

A さたけん家は地域に根差した“家”のような場所を目指しているので、常連さんになってくれる方がいいと思っています。

通信は、小学校と自治会、幼稚園、保育園、福祉施設などを通して配布していただいているので、新しく入って来られた方にも何らかの形で知っていただけたと思います。ホームページやフェイスブックでも報告をしています。

Q さたけん家

「検証」の部分のスライドが見えなかったのですが、そこが知りたいです。冊子になかった。

A ホームページにUPしました。

「グループワークからの質問」

Q 思いがあればできるのか？何が必要か？

A 何をするかによると思いますが、なんらかのことはできると思います。必要なものは行動力かな…

Q どうしたら永く続けられるか？

A たくさんの方の手助けを得ることだと思います。

Q 視野を広げるために何をしているか？

A 特に気にかけていることはないですが、子どもたちのためにという思いが、いろいろと考えさせてくれる気がします。

Q 第二の水木さんをどうやって生み出すのか？

どうつくればいいのか？

A 今の若い方は、女性でも高学歴だったり、仕事をした経験がある方がほとんどなので、力を持っています。それを生かせるのは、先を生きる方たちだったり、行政だったり、如何に活動してもらえような舞台を用意するかだと思います。それが出来れば自然に出てくると思います。

Q さたけん家は特異事例なのか？一般化できる

(すべき)事例なのかどうか？全校区に水木さん(交渉術)はいないのではないのか？

A さたけん家に限らず、市民が立ち上げるものは

詳細までを含めると一般化できるものではないと思います。ただし、基本の部分は一般化できると思いますが、一般化すべきだと思います。そうすることで、私みたいな特異な人がいなくてもできる仕組みとなるのだと考えます。

Q 民間が公共施設を運営するにあたって財源の確保はどうしていけば良いか？

A 民間のみで行うものは、利益を生み出す活動がないと厳しいと思います。寄付も手立ての一つではありますが、寄付を募らなければ続けられない仕組みは、公共性の高い活動を行い、幅広い支持を得る必要があると思います。

Q 当事者の課題解決は、行政の在り方を変えないと現状ではフィットしないのではないのか？

A 行政の担当者は数年で異動となりますので、フットワークの軽い取り組みや、息の長い取り組みは不向きなこと、ヒューマンスケールの問題は、暮らしを営む人が一番わかっていることから、市民が先例を作る方法もあっていいのではないかと思います。

Q 七割のしんどさは？

A 自分の生活、仕事、家事、家族の生活、など普通に暮らしていることに加えての活動であるため、かなり時間的に厳しい生活となること。加えて無償の活動であっても、周知されるにしたがって、「お金儲けをしている」などの陰口

を言われたりなどすべてあげればきりがなくいろいろなありました。

Q 水木さん以外にもキーパーソンはいるのか？

その人たちをどう巻き込んだのか？

A 大家さんをつないでくれた店長の新名さんが

キーパーソンと言えと思いますが、誰が欠けても困るけれど、誰がお休みしても大丈夫なゆるい集合体と言えと思っています。どう巻き込んだかは、自分の利益のための活動でなければ、共感してくれる人が出てくるのだと思います。

Q 水木さん自身この地域に長く住んでいる訳ではないのにどうやって巻き込んだのか？

A もともとニュータウンは新しい住民で作られた町なので、ヨソモノに対しても寛容な気がします。地元の人でないことで動きやすいというメリットもありますし。巻き込みに関しては上記記載。

Q オーナーさんとの関係性は？

A 大家さんのことですね。大家さん自体が活動を支持してくれているので、五年間続けて来られたので感謝しています。細かいことでは意見の相違はありますが、目的が同じだからこそクリアしてこられたのだと思います。

Q 次の展望はどう考えていますか？

A 福祉的活動が出来る仕組みとすることです。

Q 各地域歴史というところと地域の祭りがあつて↓世代間を超えた集まり その祭りを上手くつか

つて新たな人を取り込めないか？

A 佐竹台には寺社仏閣がないため、歴史のある祭

りと言うものはないのですが、毎年地域で夏祭りは開催しています。さたけん家も参加しているの、たくさんの方にお立ち寄りいただいています。百人のお客さんより一人の自分事に考えてくれる方と繋がることの方が、その先の展開があると思っていますので、非日常よりも日常で繋がっていききたいと思っています。

Q 水木さんへ

ご家族、お子さん、お仕事をお持ちで、これだけの時間と力をどのように使い分けておられるのですか？

A 使い分けられてないですよ(苦笑)。睡眠時間を削り、家事を手抜きしてやっています。子ども

たちには、子どもたちを大切に思っているということが伝わる努力はしています。手伝ってくれる仲間がいれば、なんとかなるものだと思います。

Q 関心のある人、ない人が極端ではないか？

A そうだと思います。しかし、私と全く同じ考えを持ってもらおう、同じように動いてもらおうとは考えていないのです。関心のあるところ、自分ができるところで関わってもらって、そこ

から何かを感じてもらえたらいいと思います。

Q 子どもって習い事等で忙しいんじゃないの？

A 忙しいと思います。

Q 「コミュニケーション下手」な子ども、多くな

い？

A 、何とも言えませんが：仮に多いとすれば、環境や今の大人の影響だと思います。

Q 新しいプロジェクトを立ち上げる時のアドバ

イスを何でもいので教えてください。

A 何を立ち上げるかによって変わらると思うのですが：私は共感してくれる人をたくさん見つけることだと思います。

Q 人の可能性を引き出す方法は？

A その人の得意を見つけ、背中を押すことでしょうか：

Q 四十代の人を中心になっているのに感動、四十代の人はどうしたらこんなにたくさんの方がかわれるか？

A さたけん家の三十〜四十代のたちは、もともとはPTAでのつながりの方々です。学校行事やさたけん家を作る過程で、一緒に活動をしてきたことがつながりの基礎になっています。さたけん家が出来てからのつながりは、関わってくださる方にも、さたけん家にも地域にもメリッ

トのあるような、三方よしを考えて活動をしてきたからこそ、関わってくださる方が増えていったのだと思います。

Q ニーズをどうやって吸い上げてプロジェクトとして実現していったのですか？

A 必要と思われることを小さくはじめて形にしていきました。

Q 助成終了後の次の展望は？

A 今年度の助成は提言検証助成で、さたけん家の運営のための助成ではないので、資金的にサポートされたわけではなく、三年間は自主運営をしてきました。今後の展望は、自治体を含め様々な方たちと協働で居場所の在り方を考えていくことです。

Q カフェの存続をはかるための長期プランの工夫は？

A カフェの存続が目的ではなく、人が集い助け合える居場所の継続が目的です。この場所を継続して欲しいと思ってくれる人が多ければ多いほど、存続の可能性が大きくなると思いますので、日々努力するだけだと思います。

Q 新しい人も入りやすい、世代交代もできる工夫は？

A 何らかのメリットが提供できる工夫だと思います。

トヨタ財団検証提言助成報告会「まちづくりトークカフェ」

□主催

佐竹台スマイルプロジェクト実行委員会

□協力

佐竹台地区青少年対策委員会

社会福祉法人のぞみ福祉会 ブルーリボン喫茶

・司会進行

吹田市立市民公益活動センター 柳瀬真佐子

・発表者

佐竹台スマイルプロジェクト代表 水木千代美

近畿大学建築学科 鈴木毅先生

大阪人間科学大学社会福祉学科 石川久仁子先生

大阪教育大学教養学科 新崎国広先生

・出席者

吹田市長 後藤圭二

公益財団法人トヨタ財団 喜田亮子

佐竹台連合自治会長 谷川一二

佐竹台地区青少年対策委員会委員長 浦濱祐一

他 73 名 計 82 名

トヨタ財団検証提言助成報告会「まちづくりトークカフェ」議事録

2016 年 4 月 25 日発行

発行責任者 水木千代美

発行元 佐竹台スマイルプロジェクト実行委員会

〒565-0855 大阪府吹田市佐竹台 2-5-5

TEL:06-6871-7557（さたけん家）

E-mail : satakedai.s.p@gmail.com

■この冊子は、公益財団法人トヨタ財団の検証・提言助成をいただき作成しました。